

季寄  
註解

改正月令博物筌

九月部

三

俳諧資料カ一卜

0-58

年代



編者  
(筆者)

書名

備考

(下垣内蔵)



九月部目錄

△卯ある人能諧  
の季と持りの之

○養生の法に雨風の考の米の豊凶  
○妙茶の季とてぬ祭其外人家  
重宝のこくハ処々不数多あり  
ゆく目錄よらんてある事

九月

卦 月支 調子  
陰陽生 異名並註  
九 初

△寒露節 九二丁 △霜降中 九三丁

日令

此部ハ九月日の定つてころ  
支の定りころとてある事

○ 裕 九三丁 △御香宮祭 九四丁

△鞍馬祭 九四丁 日 都 野 幸 並 神 饗 九

△醍醐祭 九五丁 △木幡祭 九五丁

△不堪田奏 九五丁 日 八 桂宮相模 九五丁

△醍醐宵祭 九五丁 △重陽節 九五丁

△菊天 △菜節 九六丁  
△彩節 △栗いそみ 九六丁

△菊花宴 △重陽宴 △菊の酒 九六丁  
△菊瓶 △菜葉命 九六丁

日七 日五

日九日九

△菊の着綿カキ 七丁

△菊花宴カキ 八丁

△後雛カキ 九丁

△貴船祭カキ 九丁

△生玉祭カキ 九丁

△九日小袖カキ 九丁

△小重陽カキ 九丁

△五條天神祭カキ 九丁

△例幣カキ 九丁

△太秦牛祭カキ 九丁

△後の月△豆名月△名月△十三夜

△住吉相撲會カキ 九丁

△白川祭カキ 九丁

△天王寺念佛會カキ 九丁

日九日九

△佩萸カキ 八丁

△何とめ酒カキ 八丁

△京醍醐祭カキ 九丁

△鹿谷天王祭カキ 九丁

△一宮祭カキ 九丁

△全日菊カキ 九丁

△近江四宮祭カキ 九丁

△下鳥羽祭カキ 九丁

△御難餅カキ 九丁

△後名月カキ 九丁

△室の市カキ 九丁

△天寺兼會カキ 九丁

△都岩倉祭カキ 九丁

日五十

△粟田口祭カキ 九丁

△小倉祭カキ 九丁

△度會新嘗會カキ 九丁

△野の宮別カキ 九丁

△津吳服祭カキ 九丁

△婆利女祭カキ 九丁

△八幡花頭カキ 九丁

△定祭カキ 九丁

△逆神祭カキ 九丁

△北山祭カキ 九丁

△鳴滝祭カキ 九丁

△周防山口祭カキ 九丁

△伊勢御遷宮カキ 九丁

日六十日七十日八十日九十

△神田祭カキ 九丁

△岡寄祭カキ 九丁

△桂川御板カキ 九丁

△攝穴綾祭カキ 九丁

△城南神祭カキ 九丁

△旅夷祭カキ 九丁

△上難波祭カキ 九丁

△座六祭カキ 九丁

△天満流鏝馬カキ 九丁

△津村祭カキ 九丁

△任吉神送カキ 九丁

△番船△早綿カキ 九丁

△月令カキ 九丁

日四九日六九日八九

此部八日の定らざる九月

一ヶ月のくわあつちりす

日三十日二十日一十日十

△落水 カ △海羸廻 カ

△新綿 カ

△時令 カ 此部ふの九月の時節ふのハ  
アソリシ霜の冬に出ス

△暮の秋 カ △秋深 カ △冬と初 カ △冬と終 カ

△九月尽 カ △野山錦 カ △山莊 カ

△秋霜 カ △露霜 カ

△露時雨 カ △露寒 カ

△草木 カ 此部ふの九月一ヶ月の草  
木の類をあらわしる

△菊 カ △白菊 カ △黄菊等菊 カ

△菊合 カ △菊花香 カ

△地榆花 カ △川芎花 カ

○黄芩花 カ ○岩菊花 カ

△蘆穂絮 カ △薄散 カ

△椿の実 カ ○橘の実 カ

△密柑 カ △柑子 カ

△九年母 カ △金柑 カ

△温州橘 カ △佛手柑 カ

△温柑 カ △南天燭子 カ

△罌子桐実 カ △皂角子 カ

△木薬子 カ △菩提樹 カ

△川棟子 カ △桐油実 カ

△掠実 カ △檳榔実 カ

△桐実 カ △老母草実 カ

△栗子 カ △越栗 カ

△落栗 カ △栲栗 カ

△茅栗 カ △栗子饅 カ

△锥栗 カ △三度栗 カ

△榛子 カ △榛子 カ

△推カ 推柴カ

△推カの葉△推カの枝  
△由カての葉の

△新胡桃カ △新榎子カ

△新松子カ △水木子カ

△菜萁カ △瓢樹カ

△榎実カ △熟柿カ

△無花果カ △鴨上戸カ

△仙蓼カ △晚稻カ

△漆子カ △紅葉カ 種カのくま

△色カの松カ △破芭蕉カ

△干土生カ △うら粘カ

△緑豆引カ △蕎麥刈カ

△牡丹カ △佛甲草カ

△小蓮花カ △菖蒲花カ

○艸木くく用意カ

△梅嫌カ

△生類カ 此部カの九月一ヶ月カ

△尾越鴨カ △熊栗棚カ

△霜踏鹿カ △紅葉鮒カ

△豺祭獸カ △爵父水為蛤カ

△細代打カ

△必用カ 此部カの風雨の占の破軍のひ

心得の作事カのよし他カの養生の衣服

式。生花の式。料理カの法食物

のし等其外品カのあつむむ日乃

定カの口の日今の部カの此

部カの日のきまううる二月一ヶ月要

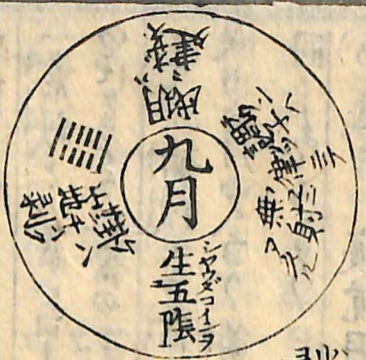
用の事とあつむむと

△紅葉衣カ

九月 目錄終

九月之部

△印付くるハ世身能諧  
季寄出て用米る景物



剥群陰陽と  
剥尽寸月多  
仍て草木花  
葉とらて枝  
幹漸とて  
剥落すま

無射ハ陰気外陽氣降て萬物陽  
氣小隨ひて出て貪るははた人ハ  
虫魚の類蟄伏一草木根ハ腐り  
潜むはは射はは仍て無射と云

異名

△季秋 礼記の暮秋 留書采珍  
△梢秋 四時纂要 晚秋 韵府

△無射 礼記の寒露 韵府の玄月 異名  
△素秋 韵府の菊秋 事物異名

和名 彩月 〇紅樹月 〇菊月

△菊開月 〇寢覚月 〇紅葉月

△木深月 〇小田刈月 〇梢の秋

△長月 可る多し 〇八月の口ホあるす

異名註

おめりのちう △季秋の季の末の秋の  
まゝと云ふと云ふと云ふの暮

秋といふ秋の暮るる年の暮とれ  
るおどして夕の暮にている 未

秋といふの秋さう △梢秋の梢の  
こゝをよみて 諸木紅葉し梢の

る色くゆく梢秋といふと季吟  
いひり △晩秋の暮秋と同じ

晩の秋といふ事さう △無射の  
上おのり △寒露の節の名さう

△玄月といふ玄のクロレと訓黒とい  
純陰の色さうよめて玄月と云

△素秋といふ素の白し秋乃金気  
のほろさう如金の本色白くれち

さうの菊秋といふ當月の菊花乃  
咲出る月ゆさう 菊開月といふも

同じさうさう  
同しさうさう

① 藏玉 寝覚月 家隆  
いづくぢらねるし枕の寝さう月  
秋まはたへぬぢらねるさう

秘藏 彩月

月盤山いろさう月ふありあき  
あきさうさうさうさうさう

莫傳 菊開月  
おとあきさうさう松果さうさう

雪玉集 梢の秋 木まの秋 実隆  
名ははちや梢の結けさうの月

莫傳 紅葉月  
おとあきさうさうさうさうさう

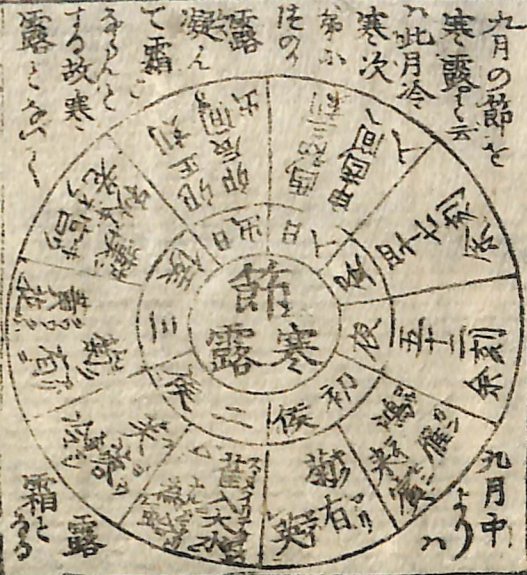
新古今 長月 花山院  
おとあきさうさうさうさうさう

藏玉 小田月  
おとあきさうさうさうさうさう

寒露 九月節の名の七十五候の柳木  
七十二候の月盤入昼夜長短さう

おとあきさうさうさうさうさう

おとあきさうさうさうさうさう



九月の節と  
寒露と云  
此月冷  
寒次  
霜  
露  
雁  
雀  
田鼠  
潜物

鳴雁來賓と雁の仲秋先來の  
の注と云り季秋ふおされて來  
るの賓と云すまの瘵有

英づると云雀海へ入て蛤也  
さるもて飛るの化して潜物

又動物と云るた入りた入の田鼠  
穴居り潜物と云るさる水

蟲蜻蛉と成毛虫蝶と變る皆  
天道の盈とるてくんで謙

減と故小飛ぶ物に潜む所謂如  
斯一芙蓉冷しとい荷葉枯

破して倒る様物凄く冷し  
菊有黃花とい既の盛んとい

開くと云り黃の菊の本色を  
云ふなり漢宮の漢の代の宮

女の物なりいとていと云り居  
るふたると秋ふくさるふと

がいて婦女たぐのこのおふ  
頃ふるなりと云るといふなり

節天氣占候 此月己午は方  
より雲出せ

必風と云く北西の風久しく  
吹くと云風の後小雨ふると此

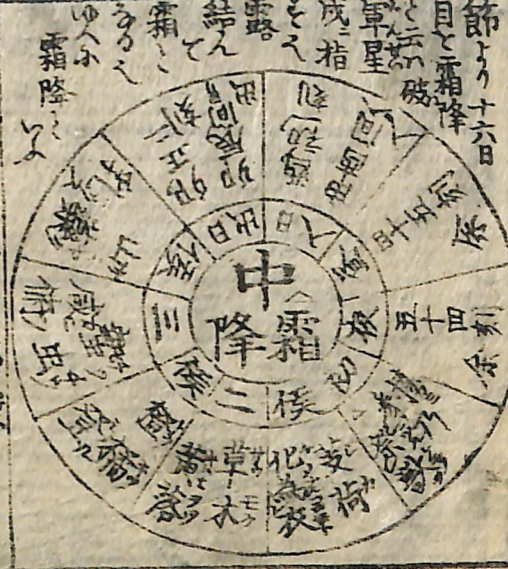
月のとせの十日十九日十七日必  
風雨のあり日入雷ふり米貴し

虹と云麻の價貴し五穀もたじ  
月蝕あり幸ありて凶年あり

霜降 九月中第一の上候の神未七十二候  
日短夜の長短を記す

霜降 九月中第一の上候の神未七十二候  
日短夜の長短を記す





△射の山犬云根之尤性下りのく  
 かゝり獸あり、鹿鬼の類と殺  
 して天と祭るゝの麦の麦の  
 浮葉あり、荷の蓮の葉入るる  
 枯て羅のすめたる故衣化してと  
 ひふあり、○草木黄落の諸木

と云る紅葉、千草黄と枯と  
 と云るりの橙、だつとさう橘  
 みくえ、此類るる登るる、○蟄虫

咸俯のこゝて虫の類ハ蛇蛙よ  
 ようす咸地ふるゝとと俯とさ  
 ○山藥と自然諸讀あり

乳ととい実の入る事乳のさ  
 たるやうなれりあり

九月の日は定つゝとるる  
 此の定つゝとるる此部

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

日令。今日より八日まで着す九月  
 裕。より綿入り夏ハ四月明日よ

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔不成。今日雨風おれり、麥價は  
 就日。○風霜と飛を人氏擲

朔京鞍馬祭今皇神輿渡祭九日御今日

御旅所へ御出九日をさる契明神と云大己貴尊こころまう

朔六天王寺金堂安宮嶋今日坂金刺講刻音樂藝日市あり

南氷室祭南都四十四氏神都祭春日伶人舞樂あり大知志

○春日若宮御繩棟の式今日あり若宮御旅所の常は今日是假社と宮

二今日晴れ來年春雲日あり今日房事と慎いへ

南東大寺鎮守八幡祭此祭都久退轉やが京都天明

災災の後故有て再興せりなり昔小復つと嚴重なりこと

三北斗小御燈と奉らると清河の日あり年中行司貞世

ふ向とる星のひろはふふふるはのを秋のさり火

京大通寺六孫王御出多都音堂水仕山城固まうり

四京北野半莖神輿北野天都神祭八月なれも今絶と

了今日氏地より半莖御輿と菜菓と以て神輿と造り渡御のひと各

五山醍醐祭御出今日あり城み日野小あり

○萱尾明神祭醍醐のこみみ

六京高臺院殿大閣あり吉公の都政所高臺寺方丈と職法あり

七不堪田奏昔諸國の田の積をして奉らるとれかつさと租税と免

一ありとありの作こふたくさる田とふ心こそ不堪田と云なり公事根源

○年中行司いはたる町のをしぬぬ

非 而此の各所の古や不法田 供等

京 久世祭の久世の神社に久世郡寺

都 田村の氏神と云 西の國久世村祭

遠 中郷祭又飛神祭とも云の祭神

江 春日四所の大正命と合せて五正明神

如上 北風東風吹け来羊

占候 三月七月米價貴し

日八 桂宮相撲 六条北西洞院西

京 泉涌寺舍利會の湛海と云

都 僧嘉禎末の宋より持つりし舎

利 此日音楽あり泉涌

寺 台密禪律の四宗あり

○玉水祭の山城國井手の郷

玉水乃里なり

江 勾當内侍祭の堅田の浦の塚あり

州 夜祭に内侍新田義貞の妻に

醍醐宵月祭 今夜社前を詠三

九不成 重陽節 節 節 節

日就日 重陽節 節 節 節

菊花宴 重陽の宴 菊花酒



○おけ置一柔の綿してのくへとも  
おりにいさくそあふめいゆる 相模

九日 佩萸

此日茱萸ヲ佩ビ  
菊花酒ヲ呑ム

ハ費長房が桓景ニ災ヲサクル術ヲ教  
タル故事ヲ由來トス此事甚論アリ  
委シク日本歳時記小年明ヌ

○唐土ふへ今も今日山ふのふ  
つて菊花酒と呑婦人茱萸の  
体とおぶる事文類聚小出

菊花宴

周ノ穆王ノ愛童ヲ  
慈童ト云レガ罪ヲ

蒙ムリテ鄱縣山ニ謫サレタリ此  
山谷ニ菊花充滿セリ慈童常

ニコノ菊ノ満リヲ吞レガ終ニ八  
百餘歳ノ壽ヲ保チ魏ノ文帝

ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝  
ニ此術ヲ授ケ奉リシカハ文帝ヨ

ヲ受テ百年ノ壽ヲタモチ玉ヘリ  
歎ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニ

ヒタレテ用ユレバ壽ヲ一スト云傳ヘ  
タリ委シク日本歳時記ニ出タリ

詩 重陽五字對句

同上

捧筐萸香遍

臨風孟嘉帽

稱觴菊花濃

乘興李膺舟

詩 全七字對句

詩礎

今日暫同芳菊飲

獻酬杯

明朝應作斷蓬飛

客中愁

詩 重陽之詞

崔國輔

秋葉風吹黃蛺蝶

夕陽紅似火

雲カアルソレヲ日ガテラ荒  
シロイイロガキラクトミル  
歸來得問茱

萸女 山カラカヘツテ來タ茱萸 今日登  
高醉幾人 今日ヤニヘホツタヒトヲ

狀 九月節句之尺牘

重九鄭重々々名ククハフクイハ黃花馥郁イハ偶有イハ

送壺酒コルコシユヲ客カク敬待公之ウツシテテコウノ曳藜於イレイ

最間催風月興趣連々カニニモ素ンマフククハカクハニレシハ、まきクハカキ玉韻詞々カ

重九カセツ佳節キウジツ○九日キクハニ○登高日カキ

○奠節ユセツ○九々良日クハノリヨクジツ○黃花佳期スウクハカキ

鄭重テイイキヤウ至祝ニシユカ○嘉幸カユウ○致歡キクハニク

○申悅シユフウヲ送壺酒オクルコシユヲ贈孤樽オクルコソニヲ○以モツテ

酒壘シユフウヲ曳藜アイレイ寄駕於蝸庐ヨセヨムヲ クハロニ

○來叩蓬戶キタツテタケホウコ風月興趣フウゲツノケウニシ尋芳タツ子ハシラ

玩景マシクオシマ○寄趣烟霞ヨセヨシユヲ エニカニ連々玉韻レシクキヨクイシ

自作口頭吟ミカラ多ルコウトウノキナラ○五七言之芳韻コヒチゴニノハクイシ

九日クニあつめ酒アツメ今日コノヒよりヨリの式事シキコトの酒サケもモつてツ用ヨじル

世諺セセリ問答モンカウ小も出コモデさうサウ○抑元且ヨシキの屠菘酒トウシュウと用ヨいらイらラうウ○桃花トウカ昔キナ

蒲ホの酒サケきキくク式正シキマサの冷酒サマシユありアリ食物シキモノ本草ホウソウにもニモ酒サケの冷飲サマシユ宜ヨシいとて

冷酒サマシユのノとト用ヨゆユうウとト貴タカシふブ○俳ハイあアつツめメ酒サケのノ冬フユをヲ引ヒキ雪水ユキミヅ

九日クニ後籬コシ籬シのノこコのノ三月ミヅキの部ベの委イ

○俳ハイ角ツノカカよりヨリ官ツカサマ不ツてテのノ多オホク小籬コシカカ鼠ネズミ

○狂キヤウ長チカらラにニ處トコロとトこコふフ入イるル○狂キヤウ風フウ小コ出デるル後ノチのノいイまマうウ邪ヤ貞柳チカヤナギ

九京クニ醍醐祭チゴト下シモ醍醐チゴト長尾チカビ天満宮テンマンミヤ

○上ウヘれレいイとト清滝チヨタキ権現ケンゲンへヘ護法ゴホフ神カミ之ノともトモ小コ今イマ日ヒ神輿カミコとト渡ワタをヲ下シれレとト

天神テンジンの社ヤシロ頭カビ小能コノウありアリ笠取山カサトリヤマの山上カサトリヤマ山下カサトリヤマに鎮座チンザありアリ

○考 ぬそくまじそをわらう向、  
釜丸山の法勝のこや 慈鎮

九 貴船祭 祭神二座高靈。  
奥御前。當社ハ龍

徳の垂跡小して雨を祈り雨を止  
ひる事と祈る御神あり

○新古今にわら回のうらほをうせ  
うけてせせふらるに上の神 加茂草

九 鹿谷天王祭 浄土寺村十禪師  
まうりともいふ

祭昔ハ廿四日なれども今ハ九日  
あり京銀閣寺門前小十禪寺社あり

○中村祭。長谷の内より夜小入  
行り故俗又盗人まうりといふ

九 坂生玉祭 祭神活玉神今  
日流鎔馬等あり

九 河内一宮祭 平岡神社と云祭  
如和州春日同神

○科長神社。祭ハ六月八月九月  
九日山田村東條より延喜式出

肥。長寄諏訪明神祭。傘針  
前踊等あり甚まば十日ハ鹿解

と九日供しう鹿とて各拜  
殿ふて鹿と看とて酒と香と

播。明石大倉谷稲久神社祭  
磨祭日ハ三人牛に乗アと社頭

泰。例式ありゆへは牛来祭  
しつあり

九 天氣 九日晴と至る雨降し  
少は晴ふれハ冬至並

来年元日兩日晴天と冬中雨  
も少なり若雨降ハ月中降はく若

降されハ豊年の兆あり。終日東北  
の風ありても豊年之兆ハ風ハ来年凶

九 日小袖 御湯殿記曰九月節  
白より二ツ襟と云今

日より縹色小袖と着と小袖  
ハ縹入まこのことあり

十 十日菊 後日菊。後菊  
残菊。残菊

菊の九日の佳節不用物よりふ  
たれて十日小用ゆるしつる禁中  
残菊宴あり

○千載

基俊

くさくさなれはさるる霜てりてまを  
霧さむひくきる葉のたれ

○連 かのちて初まきくの初まき 昌休

○非 ひきひ十日の酒れきまき 其角

○狂 九日のまきりちまき十日ふ  
かゝるふらふらひまき 菊里

○詩 十日菊五字對句

詩磔

○開 陶公與

蜂猶探 十日残  
ニテニテ

○餐 英楚答詞

蝶尚狂 日テカ  
キクニル

十日 小重陽

唐土の京俗今日會  
して小重陽といふ本

朝ふての後宴といふ

○今日よりたいとるへ

十日 近江四宮祭

神龍降火火出見尊  
大津四宮丁ふあり引

山十四番移り物たる造花等出  
近郷なごは京祇園祭の山鉾

○大津高山寺若宮祭

十日 京都五條天神祭

祭る所少  
彦名命を

アとそ京師乃俗このヤ一  
と天使の社といふ

下鳥羽祭

山城国宇治郡下鳥  
羽あり午頭天王

と祭る田中天王と名づく

○非 小名ねの祭や善れ善れ 豊水

十日 若○遠敷大明神祭。祭神上の宮へ  
狭火火出見尊下の宮へ豊玉姫あり

十日 例幣

天子より伊勢大神  
宮へ御幣と奉る

例年のことなれはかく  
徳天皇と下りて此使と制する

例幣使といふ

○非 例幣は風鈴軒



狂冠の礼と云はれてのさくくと  
めとさなり初はるなりなり 百二

十京 ○六孫王権現祭。八條北大通  
日都 寺小あり六孫王經基公と祭る

二十日 御難餅 ○日蓮上人七字の  
題目と云ふ人一流

の宗門と立て安国論と著し  
諸宗とそしる故小平の時頼怒て

伊豆不流と三年して免れ鎌倉  
へ歸て尚諸宗と誹るふよりて弟

子とてふ土の牢ふ入る文永八年九  
月十二日鎌倉龍の口と云ふ處ふて

首と切んとせ時頼の子これと憐  
とて死罪とせむ佐渡の國に流と

其後大赦ありて歸る上人遷化の  
後弟子の僧竜の口ふ寺と建る

これと龍口寺といふ今日叅詣  
多し像の前ふ資と供ふ今日

難ふあひて一日ゆへ今日そま  
餅と御難餅といふなり

二十日 都太秦牛祭 ○太秦廣隆寺  
といふ桂宮院

内小加藍神あり大酒神と云聖  
徳太子川勝ふあやて建る丸く

摩多羅神と祭る日あり上宮  
王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛

小乗て高声ふ祭文とよむ此祭文  
甚奇く委く追て補遺ふしう寺

俳句のたのむれ流して牛糸、煮堂  
年糸ふちやのむり、皮つると 桃隣

二十日 大武峯祭。田身嶺といふ  
日和本殿の中央に大織冠鎌足公へ

三十日 今日晴ふれ晴久しつて残る  
綿とること多し雨降る冬雨雪多し

後名月 △後の月△豆名月△栗  
名月△二夜月△名残月

十三夜。此夜の月と賞とる事  
寛平法皇より始まる保延元

年九月十三夜ふゆの雲いそぐ  
月明りく明月無双のより仰

出されしより今日と明月と  
中右記不出 鳥羽天皇保安二

年小関白忠道公九月十三夜の月  
を賞したまふ詩あり(歳時記に出

○五雜俎曰上已有風梨有蠹中  
秋無月 蟬無胎 九月十三夜晴

釘靴掛断繩とつり其外説多し  
日本歳時記不委一々ハ畧之

○民俗今夜豆と豆と少く食ふ粟  
ともし食ふ批沢委しく歳時記拾遺と

つり書不出とつり面白きことなり  
○續後拾遺 二夜月

草庵集 頃阿  
あはれけしとつりおのちのちのちのち

月もえふおふこといふことん  
○連 玉のねらふは月の二夜は宗碩

○俳 本考は無きまこといふ後の月  
俵いふ木の向ふたつ枝の月 蘭

豆を食て豆の花も縁もを 費

狂 名月おもしろい月の秋つとら  
ニツちついのとつり草月 金波

詩 九月十三夜詞 林春信

季 秋逢過十三天 末ノ秋ノ中テコヨ  
ヒ十三夜ノ空ニ

月ヲミルトキ 明月無雲自粲然ノ明  
ニアラタゾ 今夜似星殘菊

色 星ノヤウニ三元 蟾光相映一欄  
残キクノイロヲミレハ

前 月ノ光リニハヘアラテランカニ  
ニハニキラクトスル

十大 住吉相撲會 △室の市  
△外の市

今日神輿場の宿院へ渡御  
相撲十三番あり故ふことん

會しよ今日社頭ふ外とつり鉢と  
商人是と室の市とつり市笑姿

の神あり諸国市の始りといふ  
○俳 非 夢みて分別つる月ええと色蒸

在年若一松竹のいれあふれ  
これこそ人の室ありたり 貞柳

十三日 京 白川祭 祭神天満宮白川村南  
の方有知の生主神とす

十四日 大坂 天王寺一乘會 昔ハ今日  
修行あり

十五日 大念佛會と行なり

十五日 大坂 天王寺念佛會 今日未  
刻六時

堂を修行と太子の鳳輦と六  
時堂あり奉り舞樂あり當寺に

て涅槃會聖霊會今日の念佛會  
これを三大會といひて嚴重乃

法會あり俗ハ柳祭といふ  
○三津八幡祭 ○玉造稻荷祭

十五日 京 岩倉祭 北山の岩倉山  
より祭神十二座

昔ハ王城の四隅ハ岩倉ありて社と

れて帝都の守護とす是ハ其一  
あり祭礼夜ハ入神供と奉る

十五日 京 栗田口祭 午頭天王と祭  
る餅十七本あり

昼ハ栗田御殿ハ入り夜ハ白川  
橋と越て知恩院より細き

板橋と渡るとりれ上りて餅の曲  
特あり甚面白きこととす

十五日 江戸 神田祭 天平二年ハ大己貴  
命と鎮座古ハ

神田とて国々ハ大神宮ハ初穂と  
納むる御田あり大己貴命ハ五穀

の神なりハ右神田ハ此神と祭  
るハ其後延文の頃より將門の吳

と本殿のわたり祭とて今ニ  
座とす祭りの隔年とて子寅辰午

申戌ハ山王祭と此祭と江戸の大祭とす  
○俳 ことばと釣酒の郊田柿系 李々

十五日 前小倉祭 祭神三座ハ應神  
天皇、神功皇后、玉

倭姫宮の十四日神輿つり殿小渡御  
やぶさめあり夜分抜あり十五日祭入

六十山 東天王の社と云  
日城 西天王の社の吉

田山の麓に有鉾七本あり神輿  
先達てゆく是と鉾とまらふと云

其内一本の鉾鉞はバの上ふ土まて  
つくり大鷹とせし名づるて大鷹

の鉾とつて神室とす 雍州府志出  
一書小祭ハ九月十五日入と云

○伏見三洲祭。天武天皇と祭  
る人又午頭天皇ともつり十二日の御出

○岩屋明神祭。神体宮道祖  
神人山科大宅村の東ふあり

十六 度會新嘗會 神嘗祭  
日 伊勢外宮へ天子より新嘗の初

徳と供しる度會とい伊勢外  
宮鎮座の處の名なり内裏新

嘗會と同一と云 俗小御祭

と稱と明十七日内宮ふあり事  
実外宮と同一事なり

○非 せそそも名わじマ新嘗會風  
神も涉ひるふせの夫が寺東巴

十六 江 芝神明祭 十日より十一  
日 戸日迄祭礼の間甚賑なり

寛仁二年九月十六日此處小鎮座  
多し生薑の市あり参詣の人

兼生薑と求めたり家毎小糠漬  
の中へ入漬るれと喰へ半年中

邪氣感冒れ愁ひ死のがふと  
い俗小生薑祭といふ

十六 堀 神眼 大 丹 大井大明神  
日 祭 和 玉 祭 波 祭 あり

桂川御成 桂川ハ大堰川の末  
流を松の尾より

南へ桂川といへ伊勢の齋宮より  
立ちぬ皇女明十七日群行あり

前桂川よりたありとあり  
く次の野々宮の別の処ふあり

七十不成京。詠訪祭。六条鳥丸と  
就日都。齋との間をい丁ふあり

野々宮別。伊勢大神宮へ齊  
宮ふらむせり内

親王三年の間野の宮ふこりり  
物いじらひて勢州へ旅立ちり

其と天子らう々櫛とて  
齊宮の頭ふらむせりこれと別

この櫛といふ野の宮のうらひと  
つらふこりりせり野の宮とこ

ゆれてつぎへ行ふとつらふ野  
の宮の小倉山の辰己らる藪の内

小古跡と残しこれとも古の處と  
ト定めてこりりともいへり

つらふともいへりしゆふ  
野の宮の古跡象々ふあり

齊宮のこりり後鳥羽院の御  
宇は絶へり

七十撰津穴綾祭。池田の民家の  
北山上ふあり綾

羽大明神と号す應神天皇卅七年  
百瀬より呉の国の紺織女四人と

そめて織しりゆひへ今呉服と  
つらふ此呉の国の者れ始りてり

たるゆへり又和訓ふらうらる結  
とはさうとつらふ此あやとつら綾

と織らる故ふ名づくるあやとらう  
の畧へ此地祭らると應神天皇

仁徳天皇乃みまこの地ふれと  
なるる

あやとらういれとらういれいり  
あやとらういれとらういれいり

非米流ふ水もはやとの星糸貴  
本いよふらうてこれとらうか支考

八十今日遠く行く事といひ道ふ  
八十てそ支えて死て志守れに至りて

八十撰津呉服祭。池田の田圃  
の中ふ祠あり

穴織の祠ふ隔つること十町むら  
事実前ふらうてけ祠あるいひ

穴織の祠ふ隔つること十町むら  
事実前ふらうてけ祠あるいひ

穴織の祠ふ隔つること十町むら  
事実前ふらうてけ祠あるいひ

穴織の祠ふ隔つること十町むら  
事実前ふらうてけ祠あるいひ

くし結をうらる地なるや池  
田をくれこの里ともなり

十八大 ○今宮祭 やぶさちりう祭  
坂神五座なり

○天王寺廻廊立花。十七十八両日  
○高津宮祭。夏祭六月十八日

十九京 ○南禅寺亀山院御忌  
都 ○妙傳寺七面明神開帳

廿 今日本齊戒沐浴しと心と淨く  
これハ吉事と得るなり

廿 山城南神祭 祭は七社下  
城 祭は鳥羽中嶋壇

上。塔森。石倉。竹田。小枝の土人産  
沙神と守むり鳥羽上皇乃離

宮ありて是と城南の離宮也  
いんかん七城のともふありし

ゆへなるをい今鳥羽帝と  
ありてさるるとなり

廿 波利女祭 高辻室町西  
あり俗ハ繁昌

の社といふて子孫のさる人と初  
より此社の婆利女をりしと

いひ誤りてハニジヨといふ又それを  
云あやまりて繁昌とさるん

廿 京都旅夷祭 建仁寺門前  
あり宋西国師

勸請より外して旅行の海上  
ねむく人の先ツ此社ハ祭つて風

波の難あうん事といのゆ旅  
えひとといふ一説十六日とい

つりかぬくうくハ諸国祭  
礼記ハいづる面白ていふ

廿 山城幡花頭 社僧弟子髪と  
刺し衆にかり

時草花と製し酒宴催す花の  
臺ハ六月の日と多りみては

廿 能 社の改修なる寺天窓山  
来山

廿 無病長命なりといふ

日一 北 京 ○天道社祭。五条坊門猪熊有  
都 ○栢社祭。灰方の南林の内。有

日一 北 大上難波祭 俗小稻荷祭と  
坂 △ 博労町あり

本社ハ仁徳天皇と祭まじり 稻荷ハ  
地神として本社のかたりに鎮す六

月の御抜神輿御旅ハ渡御甚賑ハ  
今日ハ秋祭として神馬の渡りあり

日一 北 江 ○根津権現祭。隔年ハあり  
戸祭神委々博労釜ハ出せり

日一 北 山淀祭 小橋の乾ハあり淀  
城 △ 姫神として傍ハ千

観法師の宮あり又一座伊勢  
御門神祠としてありて納所揚枝

島小橋の東河中ハありこれと提  
社と淀姫の説まじりあり又小

橋の北ハ大荒木社としてあり同日  
神事とす又水垂ハ淀姫明神と云

ありて廿三日ハ神事ありつらと是  
まじりて伝ふる

日二 北 大座摩祭 根州西成郡の  
坂 △ 惣社として今

日の祭と相堂八十島祭としてハ口  
傳へ六月廿二日御枝の時神輿御旅御

日四 北 河 ○植松村逆様祭。北四日と  
内祭礼として廿五日と宵官とす

日四 北 江逆神祭 大津相坂關清  
水大明神蟬丸の

宮と称す此処古歌ハ詠する関の  
清水の旧跡ありつらと傳へて

此宮のあり処と今ハ清水町と称  
と此宮の別當と近松寺と弓し

て諸国説経者の本地とむら  
浄とて説経と以てせとてする者

此寺の免状とてうけたるよしと説経  
者日暮小ス夫と請ふる正徳二年乃

免状とてのりつり見たりまらつ  
日ハ説経者果ると神輿ハ供奉とて夜と

日四 北 山木幡祭 今ハ吾々子とて  
城 △ 今ハ吾々子とて

廿五不成大天満流鋪馬の式あり

廿六京北山祭浴北衣笠山世寅の  
林中小あり六所明

神とつゝ又北山天神祭とつゝ之拜殿  
として三穀豊あり祭廿七日とも云

廿七大津村祭津村御灵祭。  
鎌倉権五郎景

政の灵々祭の故の五郎の社とも  
つの中世より中央天照太神左の八  
幡宮右の鎌倉権五郎都合三  
座あり

廿八京鳴滝祭福と神祭。福  
王子社鳴滝社と

合祭るとつゝ福王子の初め歩  
齋神と云うが福王子と轉化せ  
て云説あり神体は光孝天皇  
の皇后班子を祀ひまうらうら  
とぞ京俗これをも五器ゆゑ  
まうらうらと云ふと云

○東山大谷報恩講廿七日廿八日  
○醒井荒神祭○油小路火の尊祭

廿八大光日○天王寺舍利講音樂あり  
坂○晦日石の鳥居神送り

廿九小倉の廿九日とす○今日風雨あり  
とい水難ありの今日能々身と悲し

○今日の夢窓国師忌天龍寺相  
国寺等持院等々として執行あり

卅住吉神送攝州住吉と今  
日玉出嶋御杖の

神事行りつゝ多し神祕あり神送  
のつゝ事社記に見え守十月と

神無月とさるへ神々出雲とあり  
よりありとつゝ俗説よりして

今日の神事と俗に神送とさるへ  
つゝ神無月のとさるへ委り

十月の部並に日本歳時記ふと  
ともへふとと畧す

中周防山口祭吉敷郡山口あり  
祭神住吉三社



月令

九月、月中の預つてくる  
雑事景物を-out

伊勢御遷宮

内外両宮を  
のわう 摂社

くも二十一年を歴せば、わさう  
を造營あはあり、九月をり

つゝ御遷宮の  
月しさとこまうら

番船 △綿番 △早綿。追綿  
浪花をて當年の新綿

と一時小菱垣船小積込し出船  
の吉日と定め、纜と解く前後

の番と厩と取て定老同日小  
出帆と江戸着岸の前後と争

ひ少しいて、早く着岸とらと  
手拍し出帆の見送、餞別小船

ふて種々祝ひと送つて、さうら  
浪花を綿船、近世の十月小出帆

さうら追綿とつ小綿船出帆後  
跡より出ら新綿と積む船と云

さう追綿番とも追綿船とも  
うんかりこれハ十月乃季とよ

しとれ可きらん

非 番舟や栴をさる紀わう、鬼貫  
番舟の出て、日教もあつた、午川

落水。せと落と水ともいふ  
那の実のつとれた田た

ふと、氷を切せん事ありた  
とれハ霜よくそのつとら

非 為一水考、麦一、おま、宗因  
二、結と一月仕業、れと、茶雷

海贏廻。海螺のかう小糸と巻  
席の上へ廻し打出

たつと勝守兒童の戯へ、三、百  
日並記事ハ九月九日小限る夏

とれとも、まも兒童の遊ふこと  
秋冷の節より冬へけとお小歌

新綿。此項新き綿吹出と  
賣買とら故季とん

哥ふの新綿（新綿）の夏（夏）の詠（詠）と新綿（新綿）  
 とくたて真綿（真綿）の（とくたて）七月十六日  
 詠（詠）いてしよとまひの本綿（本綿）の（とくたて）  
 非（非）ふん孫や白葉小おん（白葉小おん）の（とくたて）故栖

時令

此部（此部）の九月時節（九月時節）の  
 霜（霜）杯（杯）の夏（夏）と出（出）

暮秋

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

も九月中頃（九月中頃）より晦日（晦日）までの夏と  
 尚（尚）次（次）の詞（詞）の（も）△印（印）ある  
 能（能）の季（季）小用（小用）ゆる（ゆる）哥（哥）いも秋  
 の名残（名残）お（お）まる（まる）心（心）と多く（多く）とあり

哥家集

秋の淺 正微

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

正治百首

△秋の淺 △冬と待△冬

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

後拾遺

秋と惜 範永

おとよとつひと海（海）や際（際）をりん  
 考（考）の秋（秋）ぞわ（わ）む後（後）

夫木

前中納言定家

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

金葉

中原経則

おすよりほはま（はま）の秋（秋）とつひの  
 秋（秋）もつひのこた（こた）んとすらん

同

春秋虫 西行

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

詞

秋のたれと。秋のたれと。秋のたれと。

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

△秋の淺△冬と待△冬  
 △た△冬と隣△冬と

ふるりの露。秋の心こそおおく。霜の影も  
 えや柔くるるの秋。時雨は冬をさしそく  
 ① 非 仍 好 や 大 工 の よ の 田 舎 中 杜 悠  
 ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿

暮秋五字對句

望極関山遠 菊枝花半在  
 霜樹葉全稀

秋深烟霧多 水痕收  
 山骨瘦

半山雲影前林雨 詩礎

十里風香晚稻花 王維

荆溪白石出 天寒紅

山路元無雨 九月の未

九月盡 九月晦日といふる古

新古今 閏九月冬 大政大臣

詞 今月の秋。今月の秋。今月の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

秋の秋。秋の秋。秋の秋。

能や秋の果人のちりくこひ庵の那季由

狂 長月くらくもあまの目教ふそ  
たれてあまのこころをうとつと天寛

野山錦 のやまのしき 山粧の艸木色付  
又草花いつくく咲きつるさうらう

哥 後撰 読人不知  
秋の舞花のうきものこもこゆるま  
うらるたあひ深しとあまのこ

俳 秋の霜をひや秋のふこ由  
秋の舞花のうきものこもこゆるま

秋霜 あきのかげ 霜冬入暮秋の漸置初  
秋の霜をひや秋のふこ由

俳 秋の霜をひや秋のふこ由  
秋の霜をひや秋のふこ由

詩 秋霜五字對句  
江楼暗寒雨 鐘声菊店月

山郭冷秋霜 人跡板橋霜

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

秋の未冷氣つづくされの露むと  
んで霜とさうらう

哥 碧玉 後拍原院  
秋の未冷氣つづくされの露むと  
んで霜とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

秋の未冷氣つづくされの露むと  
んで霜とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

露霜 つゆしも 露の降りて陰陽の氣を  
さう陰氣勝て霜雪とさうらう

○作 菊の事。昔の事。松の事。竹の事。花の事。葉の事。實の事。此枝

露寒 秋の末のころして露もひ

さるゆへ此頃の露はさむくおが

草木 此部ふの九月十月諸

菊 史正忠が菊譜に曰菊惟介

九花と見る事四十日あり春苗と

生し夏盛の秋花と開き冬実

と結ぶ根と分て植まへ花葉實と

變せど実と植まへ千莖万朵一

幹と小葉色香咸變ず実よ

仙家の翫弄不老延年の灵草と

隱君子 范玉能菊。洛英。離騷。佳友

形見草 よの草 蕺菜 千代見 中日

さか草 かろよの草 秋あぶ草 秋

の花とよの草 山草 長月花

いふで草 草のありし△花の形

△曹我菊 △永和菊 たふれくさ

△美和菊とよの黄菊の事とい

る美和帝黄菊と愛した

○按ふ 承和色とい黄色といふ

鶯の依以てくれば黄色決せり

〔詩〕寛平菊合 ばきり草

〔和歌〕この万代をふまきり草

ばきり草の千代をふまきり草

〔詩〕 星見草

〔和歌〕星見草の星見草

星見草の星見草

〔詩〕 秋蔵

〔和歌〕秋蔵の秋蔵

秋蔵の秋蔵

〔詩〕 藻塩

〔和歌〕藻塩の藻塩

藻塩の藻塩

〔詩〕 篠目

〔和歌〕篠目の篠目

篠目の篠目

〔詩〕 莫傳

〔和歌〕莫傳の莫傳

莫傳の莫傳

〔詩〕 藻塩

〔和歌〕藻塩の藻塩

藻塩の藻塩

〔詩〕 秋無

〔和歌〕秋無の秋無

秋無の秋無

〔詩〕 藻塩

〔和歌〕藻塩の藻塩

藻塩の藻塩

〔詩〕 藻塩

〔和歌〕藻塩の藻塩

藻塩の藻塩

〔詩〕 藻塩

〔和歌〕藻塩の藻塩

藻塩の藻塩

〔詩〕 新勅撰

〔和歌〕新勅撰の新勅撰

新勅撰の新勅撰

〔詩〕 後拾遺

〔和歌〕後拾遺の後拾遺

後拾遺の後拾遺



詩 菊五字對句

露凝千片玉 曲池潔寒流

菊散一叢金 芳菊舒金蕊

摘來淺藍滿金樽 碎金香

植處清香依玉砌 青玉潤

濃露繁霜着似無 魏舒

何須更着螢兼雪 便好業

邊夜讀書 夜讀書

白菊詞

幾多光彩照庭除

幾多光彩照庭除

幾多光彩照庭除

幾多光彩照庭除

菊花合

殿上人の御遊とていさへた 度々あり和哥と詠と平

城天皇大同二年九月幸神泉苑西 位已上共校菊花昌泰三年詔侍臣

菊花軒千棟分左右番開色香而 擇其尤者栽之殿庭

菊花香

こころと煙く 香なり

妙術

仙術の方 黄菊と花苓と松

菊酒の方 菊の莖葉もに黍米

菊品類 程々菊 小握々

揚貴妃 白とこころあう 金目

貫黄色 銀目貫 白小銅目貫

大般若 白小重 黄大般若 黄大

大般若 薄色千 重天



かきまろのいり存 **小紫** いんげん 黄いろ

かじ紫 いんげん **鳳凰** 中 黄いろ

かきまろのいり存 **伏見** いんげん

**常盤** いんげん **黄常** いんげん

**盤** いんげん **桐壺** いんげん **有明** いんげん

**櫻菊** いんげん **銀** いんげん

**三川咲分** いんげん **黄いろ** いんげん

**仙臺咲** いんげん **唐車** いんげん

**二重天下** いんげん **乱** いんげん

**握々** いんげん **一重握々** いんげん

**石山** いんげん **大朱梅** いんげん

**郭公** いんげん **三井寺** いんげん

**黄咲末摘** いんげん

**菊品** いんげん

**愛小畧** いんげん **右菊品** いんげん

**此外** いんげん **白菊** いんげん **黄菊** いんげん **万菊** いんげん

**大菊** いんげん **小菊** いんげん **数品** いんげん

**菊品** いんげん **本小入り** いんげん

**愛小畧** いんげん **右菊品** いんげん

**本花形** いんげん **大圖** いんげん **分毫** いんげん

**たがら** いんげん **堂上方** いんげん

**哥と入り** いんげん **且ハ菊** いんげん **植中** いんげん **花** いんげん

**咲** いんげん **記** いんげん

**地榆花** いんげん **割木香** いんげん **吾亦紅** いんげん

**吾亦紅** いんげん **吾亦紅** いんげん **土川** いんげん

**川芍花** いんげん **休草** いんげん **蛇避草** いんげん **花** いんげん

**実ハ** いんげん **傘** いんげん

**川** いんげん **赤金** いんげん **枯腸** いんげん **花** いんげん

**黄今花** いんげん **赤金** いんげん **枯腸** いんげん **花** いんげん

**色又** いんげん **白色** いんげん **あり** いんげん

**俳** いんげん **ふ乃** いんげん **花** いんげん

**俳** いんげん **ふ乃** いんげん **花** いんげん

岩菊花 いんぎくの花 花黄一丸多くあり  
さしぐ一各泡きくとし云立花のく  
と留まらん用ひてはあざとの類

兼の表青く背白く  
非泡 あいのふ 二百余年前永禄年  
中まで木綿の日本へ

蘆穂絮 あしのほ 種で渡す夫故真綿の外小綿  
と云物は勿論木綿もは布小穂

絮と入て下賤の者の布子とて  
着るる今も江戸なると

中入綿とホウレイ綿と云穂入綿の  
轉化せし蒲團も蒲の穂と因

て造る故の名今も大坂を木  
綿と織と布とせりと云右の説

それもみよみよ母のまゝ  
りふあはれ花もうらや 光俊卿

非子 あいのこ 蒲團は海女の穂穂 宗鑑  
右説非の故事と合して下るる説

徳宗故事

孔門ノ関子鶯と  
云人母先タテラレシ

カバ父後妻ヲムカヘラレシニ関子鶯  
至テ孝行ナリシカド継母ハ二人の

我子ヲ愛シ継子ノ関子鶯ヲ深  
クニクメル餘リ我子ニ真綿ノ入表

服ヲ着セ兄ノ子鶯ハ芦ノ穂ノ入  
タル衣服ヲ着タリ父コレヲ聞て後

妻ヲ去ラントイハレケレバ子鶯コ  
レヲトメテイハク母在セバ一子寒

ク母去ルトキハ三子ニ寒シト云テ  
母ヲ去ラル、コヲ止メ玉ヘト父諫セ

薄散 はくさん △尾花散△枯尾花。枯尾  
花と云ハ枯る薄くもたの穂

非 あいのこ 此の果ハ尾花の穂から素堂  
末世の尾ふり松あり

椿實 つばきのみ 本字海石榴和名抄に出  
皮といき仁と取あがりて油

と取入の千梅説ハ畿内又ハ江東の方  
言小椿と木の實と云くつら

**橘子** 異名洞庭佳味荆府。黄金丸  
霜未月上。木奴事。遺母

○橘の説とるなりと多し先密柑  
さりと定むる

橘の子じて季節用つは橘又ハ  
盧橘として哥連能もハ夏とす

**密柑** 紀州有田肥後八代を  
家上とせはあり

○能ハ好の飲ほしやまを吹芭蕉  
吹わはれさくとい今の密柑ハ宗鑑

**柑子** 橘の後ハ渡江物ハ鼻  
物語ハ石のうまじり

かる水ハ小柑子とのめりたそ  
つとてとれやハ○又謡曲の通小

町ち文ハ大小柑子金柑とて  
京撰の俗靴始ハ在ハ小

柑子ハ密柑ハ賣りのハ大柑  
子ハ密柑ハ皮鹿ハ柑子ハ皮細密

**乳橘** 俗九年母と各  
母ヤとろく其ハ風の香替

**金柑** 金橘と云  
ハ金柑ヤ

○密柑。九年母。金柑の説  
真洲の説ハ小柑子ハ金柑とん

大柑子ハ密柑とるべいとりのハ  
契沖の説ハ小柑子密柑大

柑子九年母とるべいとりのハ  
いんまは是とるキ

**温州橘** 其葉密柑ハ似て薄く  
ハ其実形密柑ハ似

温州ハ漢土の地名ハ此ハ産  
る橘ハ諸州ハもとてあら

美なりハハ温州橘と  
名はもて名だか

**佛手柑** 実の形ハ人の手の如  
指あり故ハ佛手

柑と云味よかす香氣ハ  
昔日本ハあり近世ハ

枳殼 人家垣植る(俳)かきまの法印

楓樹 此名ハ蜜名之其實初め熟とれ

(俳)鎌倉の萩如し楓樹このつる葉

南天燭子 実ハ赤小豆の如く數十一ツと云うにまうとあり

聖子桐實 天竺桂の実あまどこの木と云ふの之

蠟ハ制する物ハやぶ肉桂とも云ふ

皂角子 (和名)皂莢△西海子。大木あり葉ハ槐ハ似

垂る長く尺余ハ及ぶ夏黄

台の花とひくる

木薬子 兼ハ藤のじ俗ハ実

珠ハ作る少ク一名菩提樹とも云

あくえハ甚ニ能クあり

菩提樹 樹葉共小椿ハ似し希

青ハ似てやハ尖ハ長シ尖ハ枇杷ハ

川棟子 俗ハ此花と棟ハ似し

るる実と金鈴子ハ云ハ形状ハ小

(俳)おの釣ハさハのハはハわハりハ杜

桐油實 実ハ丸ク大ク油ハ不ハ

用ハゆハ法ハあり其功ハ荏油ハ似し

本ハ叫ハ聖子桐ハ虎子桐ハ云ハ是ハ

掠實

木の榎の木に似て木一  
種変生するべし実も又

同じ熟して黒い味甘く小鳥  
好んでこれに食ふ葉ハ物と磨

き幹ハ物と寸株と截盤持盤  
と念珠も作り用とす

事甚多... 楸も大木とるなり  
① 掠の実は長とさうむや電白羽

楸實

高木あり花木瓜に似  
たり実ハ楸樹に似て

さぐく花ハ愛とふ  
① 能がやけはむかひたてさるるれ千代

榲實

又榲も唇但種類あり  
こ実と結ぶものハ榲也

此実の名と榲と名して和名つ  
たさく黒色と漆の物ハ榲半と

つくして栗より大きく葉の大  
さハ七八寸なり以て栗の同種具

物あり遠国山家これと類と  
榲半とさうり共と手元の甚

セリきりの故世の諺ハトチメン  
榲とさると急るるこのたさくは

つくり葉ハハツ手小似たり  
① 山ふくしやふさるる水も名ん

うろくありさうり拾ふ程 西行  
① さらけ実や一字と漆す三天経其角

光母草實

実熟して赤く四時  
葉凋す故ハ万年

青の名ありて唐ハ嘉祝ハ  
ら亦用也ハ花鏡ハ見えたり

① 皮はむしやハ糸袂同のむし  
るハ物ハ月やむしハむしの実史方

栗子

異名 河東飯。天台道  
果事物。砂糖舶来せり

先ハ栗子ハ果菓の最上なり漢  
土にもこれと貴み見えて唐の

李商隱ハ雜纂ハ富貴の躰と  
云ハ栗の皮と出ヤリ干て白ハ

て搗粗皮と取らるる搗栗と云  
盤とて打らるハ打栗と云



故小推と云うりついで実のこゝろ  
るる木の一名鐵楮と云う

○**非** 夏に此推をさし山ちるる白州  
笈のうへに足推の時雨の那尚白

**推柴** △推の葉 △推の小枝  
△海で推の推柴と云ハ

推の木の柴ふるふるるる推ハ  
至て小枝の多き物也山人の切り

て柴ふるふる併いさご柴ふせご  
るる推柴とよめる事もあり

○**非** 秋と守哥ふ冬冬題の詩り  
△もては推ハ推の火ありあり

○**哥** 後撰 けふふとい恨さうるる  
のさるる山のいひるるふん

拾遺 笑をいふふの杖は木の  
さるるいさるるいさるるい

**團栗** 榲の実あり ○**非** 冬々ふ  
徐宜の眼さるる實子外鬼貫

**新胡桃** 核果 ○陳倉巨室  
一種山くらと鬼くらと

といふ上品いひあふると云ハ此中  
雜りて甚皮薄くて破やと

○唐ふ白胡桃と云うるもの  
ありと云う李白の詩あり

紅羅袖裏分明見白玉盤  
中看卻無疑見老僧休念

誦腕前推下水晶珠 赤キウス  
ニアリテハアキラカニ見ユレトモ白キ玉

ノウツハニアリテハ見ワカラズトウヤラ  
老ソウガスイレヤウノジュスラツニクヤウナ

**新榧子** 大木多し木小北と牡  
とあり各花あれと云

牡ハ実と結ぶと云北ハ枝横ハ  
なま牡ハ枝上へ起る

○**俳** 極のうさぎのふよ 沖紋 紹藤  
のの實はふいも鈴よらぐられ暢中

**新松子** 松と云ふも又松ふ  
らうも所ふらうと云

又松の實といふらうと云中ふあ  
らうと云はと仁ともいふらう

水木子

喬木ノ葉梅ノ如ク花藤ヲテ黄

也実も梅ノ如ク攪リ生じ

俳火とりてそいぬあまはゆき世井蛙

菜萹

山菜萹。食菜萹。呉菜萹。つゞきも種

類より春細く黄花用と秋紅とも

俳花はておとくをれ小紫水音

瓢樹

蚊子樹又イスノ木も

葉ふふき出さる物瓢箪のふ

く胡椒の粉の器もいも用也

又吹けの笛の音あり此木は火

災と除く火と附け葉より

風と吹出して火と避く故庭砌

の生垣ふまふらり元火除木

とついでとヒヨケの中畧こつう

榎實

胡椒の大さにて味

まうてらう

俳落枝の実ふらうは葉葉蒸

熟柿

鳥柿のつぎもあ柿

柿三秋の部も出たり

俳腸汁のしうらうじも考

無花栗

古名花栗もあ栗

花栗として美のり其実枝間ふ

あり状木饅頭のこ

鴨上戸

本名白英一名鬼目と

ての名なり鬼目の実とつう。

又ツクミノイヒ子もいひよどり

好んこ此実と喰ふ

俳ツクミノイヒ子もいひよどり宗因

仙葉

本名珊瑚葉とく俗よ

赤く小丸珊瑚珠のおく小

うらひ葉うらひ葉とく愛とく



○枝の節葉のまじり故に仙葉と  
異名とす。この本邦にその実名と

るれり。又仙葉ともかくし。

○非 伝奉の実は鈍く人のむくひか三惟

晩稻 △暹稻 △晚田。いづれも  
実のち稲なり。

○非 伝のいづれなりぬ田つる支考  
州尾の一夜にさした晩稲外支龍

漆子 △漆樹の漆をわけていづ  
れも同訓なり。汁の木

よりいづれ物とゆるへ子の絞りと  
蠟とす。但し木の異種ありて

子と汁と取は別あり。

○非 木の枝の皮をぬき漆子をぬ宗因

紅葉 赤葉とも云 異名 △色見叶  
○妻恋草の錦叶 出づり

木の葉赤く又い黄なるを紅葉と  
いふ。此詞と体として紅葉と黄

葉ともかく此ころ色づく葉の

櫛。楸。柳。白膠木。漆。蕪。  
柞。蒔。櫻。梅。合歡。あやぎ

さきの類なり。

右の品々紅葉とつたば九月の季

なり。其内楓の紅葉は別として人

毎に賞する故紅葉といふ楓の

事くまり。昔は楓しかうに諸

木の葉の赤くするを紅葉と

いふ。又紅葉といふても。梢の

うき又い。まづは漆の梢を

いふても紅葉のいふるなり。

○楓。いさだ。も、そのま由このち

等い七月の草木の部。未だい。歌あり  
○昔 古今和歌集紅葉の昔い  
さね山のち、そのいさふちうむ  
よるいさふちうむす月うけ  
たね山のち、そのいさふちうむ  
照と日れいさふちうむす  
立田川に葉をいさふちうむ  
いさふちうむす月や終せん

○枝の節蓼のよき故に仙蓼と  
異名と云ふ。此の本邦にその実名と

るは、又仙霊ともかへ

○仙蓼の実不詳。人のやむひか三惟

晩稻 △暹稻 △晚田。いづれも  
おとく実の稲なり

○非 俗のいふやちん田つる支考  
州尾の一夜のさだ晩稻外支龍

漆子 △漆樹の漆をちりて  
きし同訛なり。汁の木

よりいづれ物とゆるし子の絞を  
織り守但し木は異種ありて

子と汁と取は別あり

○非 木の皮の女をいじ漆子の糸因

紅葉 赤葉とも云 異名 △色見州  
○妻恋草 ○錦州 出づり

木の葉赤く又の黄なるをい  
つゝ紅イッルとほめてりつる

よみ此詞と体して紅葉と黄  
葉ともかく此ころ色づく葉の

○楹。楸。棟。白膠木。漆。蓼。  
柞。蒨。櫻。梅。合歡。あやき

右の品々紅葉とつたば九月の季

なり其内楓の紅葉は別して人  
毎に賞する故紅葉といひ楓の

事くまり奇に楓ふかづるに諸  
木の葉の赤くするを紅葉と

つゝ又紅葉とるして山。梢の  
うき又い。まぐれは漆の梢を

よめても紅葉のこころなるなり  
○楓。ひさだ。も。そのま由こ。さぢ

等い七月の草木の部ふ委しく説あり

○昔 古今和歌集紅葉の昔に

よは心のちそのむふちうめを  
よるちうらやとてす月を

むらさきの岩をたぶるふちうめを  
思ふ日れいづり又る時をて

立田川に紅葉をいしてさるる  
つゝいあき井や経かん

夫木 △葛のおまふ

つこのさゆらの中らふちふ葛も  
秋さしなれいさうりゆく

金葉

源師賢

ちつきれ指やうつこおつふ  
皆その原い紅葉しはく

夫木 △葛の紅葉 家隆

つこのさゆらの中らふちふ葛も  
秋さしなれいさうりゆく

新古今 △楹紅葉

ちつきれ指やうつこおつふ  
皆その原い紅葉しはく

夫木 △枝の紅葉 顯昭

松うけふいふ時おのりあらん  
忘下 枝まうさみちせり

全 △さる紅葉 知家

人志世に紅葉しはくみるちの  
細川まもこりりしはく

詞 木の下らう。おまふはく。

つこのさゆらの中らふちふ葛も  
秋さしなれいさうりゆく

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△さる紅葉△ゆり紅葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△さる紅葉△ゆり紅葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△さる紅葉△ゆり紅葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△さる紅葉△ゆり紅葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△さる紅葉△ゆり紅葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

△さる紅葉△ゆり紅葉

△紅葉しはく△下紅葉△水の葉

朝の苑ふせりきるふる梅里

慈王の苑ふせりきるふる梅里

母親の苑の苑ふる梅里

拂紅系親ふの苑の苑ふる梅里

野明

「負ぬるの換よつちる時 釵夕

「蟬燭ふりてち赤し楯お紫 李坡

「狂くへての篠ふきくふる尾山

「けおくさるる余の苑の苑ふる梅里

詩 紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非因次

木杪絢殘霞 如花不待春

詩 全七字對句

紅霞迥遍具江内 殘照晚

錦綺粧成蜀道中 斷霞秋

遠上寒山石徑斜 白雲生

人家 停車坐愛楓林晚 霜葉紅於

二月花 二月花 二月花

假山之楓光色欲然

折數枝以獻左右

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

天曉 假山之楓光色欲然

楓粧色シロカキ熒紅アカカキ

折數枝以獻オチテス

左右為折サマサマニ一枝ヒトエダ獻オマケ忱鑒シニカニ

○曲キョク

多オホク荒庭幾枝アラニ聊效シテ芹意セリノイ

○曲キョク

圖隅ツグ固之ツギ楓為折カキニ一ヒト朶當ツク

○曲キョク

野獻ノノ但恐散飛タシ愛護アイゴ為妙タマシク

○曲キョク

艷妍エンケン不耐ニ數日スジツ移ウツ竹筒厭チクツク

○曲キョク

風霜フウソウ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ枯カ小松コノマツのの

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

色イロカクムカクム松マツ諸木モトモト秋小アキノあふあふ

○曲キョク

千載

藤原朝仲

毛くぬねく風のきりて

ちりけけそのみよるなり

在在も冬もたゞ美のきりて松の色

秋小あふてもけよあふても貞柳

詩 全七字對句 詩礎

濃霜滿徑無紅葉 終待鶴

晚日高枝有白雲 味成龍

詩 色不變松詞 無名氏

半依岩岫半是雲 八岩ニヨリカ

寒寒一一ホシタキニタケ高クハエテ 一事頗為

清節累清節累コノ松ノヒトツクケツハク

ニナニナ秦時曾作秦時曾作大夫官大夫官シクウ

ノトキニ大夫ノクハンヲサツケラレ

夜ガニンゲンノ身ノウヘモコノヤウナ

破芭蕉

秋風ふやぶるころ  
世のそらうらたこころふ

たると多く哥ふよふ

非 花のふる終るは破芭蕉貴

花は風ふあそふ花は多くと

やふりうまの芭蕉うらた人貞徳

干土生 干土田。櫓。稲孫。稲

の刈田より再い生る

といふ古名あつたあひもつ

堀川百首

えりてせいの田のひつらひこえて

枯 草木のひつら葉より

うら枯 色つきかきと

夫太 小孫の篠系うら枯て

月吹うらふ沙らふのうら

俳 枯の筆ふららうら加翠

うら枯やうまの松の隣まを桃溪

緑豆引 豆引。小豆引。実のう

うらと此頃いく

茗 茗はもろもろうらて

草牡丹 紫衣菊。貴布祢菊

加賀菊。繡絡菊。

京を貴布祢菊といふ大和

にて州牡丹といふ中国筋まで

シウメイ菊と云北国にて加賀

菊といふ

佛甲草 俗小岩蓮花といふ

花ひくさて実あり

小蓮花 岩蓮花を葉細

長

蒟蒻花 葉の長さ二尺が

かりにて天南星小似より

この月根を掘るあり

掃實

種は俗字えいらおの

実ふ大ふ似より標は食

掃の食ふふらないらお

の毛ありかふの毛なり

梅嫌

子と結ぶ紅梅(非)梅りた加生

種植

櫻麥、油菜、蒿苳、芥菜、紅花、蚕豆、水仙、春菜、大蒜、小麥、大麥

移栽

牡丹、芍薬、竹、其外諸の果木此月より

植てよう

月令廣義に出る尚又種まら果木うへくの仕や

諸茶

此月取入る下様等まで委しく日本歳時記九月の処に出す

草用意

菓木より実をむく方上十五日の内よりゆれ

木

実多し又菓初て熟るるとは兩手にてさるべし年々実多し

実のうら

実のうら実のうら法のそいて

菓鳥のうら

法熟る時ツツと取らすツツと取ら忽鳥と心

生類

此部は九月一ヶ月讞の生類を集めあるす

尾越鴨

山を越てかよふ朝夕々々き間おらる

越ゆ

ゆゆふ名づく其外説多し

熊栗棚

熊の冬に穴小入蟻と春と待

て出て

木ふのがり好んで栗を食ふ又枝と折るへ鋪て石巖枯

木の中

小設く是と熊の架と云

白鳥

のあら木けつわ柄として大山の麓のそこより入為家

霜踏鹿

霜踏れり尾尻ふ

霜踏鹿

霜踏れり尾尻ふ

俳

行るる霜踏心麻の法はま乙由

あつ鹿の粥合せや釣の秋南舎

狂釣はくゝあはれ君の考の鳴麻も

そねふとまゝくゝさうり討かへ 百丈

詩 遠鳥首能韻子題 後鳥羽院

都門路畔今誰問 ミヤコチカクモコナ

ガカタミニニテアルユハ 雲相上 獨望 シモノフツタウハヲヒト

麋鹿蹤 シモノフツタウハヲヒト

紅葉鮒 鮒の此頃鱈紅く成

田浦又ハ舟木浦 舟木浦より多出る

非 名月のそよやなふ流をいふ鮒伯光

豺祭獣 非 豺の祭つてさうな

爵入大水為蛤 非 我果と

右両條も註の口の二丁月令の祭出

網代打 延喜式日山城の宇治

代各一處九月ふ始まり十二月

三十日ふ至まをこれと貢とと見

えくさり 今、網代木とさうり事

九月九日よりとさうりさうり

あゝろ木と打しと川の早瀬

皮付の杭と上廣く下狭く左右

ふるくく打て其下の挟き処小網

代守の床とむと篝火とたき川水

のそア杭の中ふせうれ入ふまてうの

床の簀の上へよりる氷魚と取

るりといふく加茂真淵が百首

古説より見えさうり

○名所い。宇知川。田上川。近江

の湖より野川を哥よとあり

氷魚和名抄曰鮒 白き小魚

夫木ひとのよるあはれと風きて

田と川やあゝろくくえ 衣裳青大臣

非 朝日ふ更ふ坐るり網代打嵐雪

必用 此部ふ九月十月天氣占候 養生等要用の事と尋



方角。家普請他行南方

破	夜九ツ	子ノ方	夜八ツ	丑ノ方	夜七ツ	寅ノ方
軍	朝六ツ	卯ノ方	朝五ツ	辰ノ方	昼四ツ	巳ノ方
向	昼九ツ	午ノ方	昼八ツ	未ノ方	昼七ツ	申ノ方
方	暮六ツ	酉ノ方	夜五ツ	戌ノ方	夜四ツ	亥ノ方

時刻。酉日戌日。酉刻戌刻。事とる者小用必くは

樂事。此頃や秋冷く木々の色ハ小萩露草などの咲初りよ

出でて尾花とるの夜のさぬくの虫のひもとすえ露も中しくそくするまをさかくはくまうつりかふる秋の

生花式正。菊。川。紅葉

○鴨上戸。○ちりびと。○栗。○南天。○芦。○岩菊。○山ひらね

衣服式。朔日より八日まで裕と着と九日より綿入と

着と袴はいと色之。○女衣服。是小同一模様ハ心不随之

紅葉衣。表とけし裏黄之。一説表黄裏と

櫃紅葉衣。ねりて蕨芳。うら黄之

養生。此月陰旺一陽衰小當小精と固し神と飲む

又野外ハあまびて血脉と養生。又野外ハあまびて血脉と養生

考へてつゝむへ月の未小至り。味の其と物とちがきて辛く又

醜の百と物と増しと腎氣と補ふ。委くハ延壽養生論ハ出と

蜜柑と夏物を貯る方

杉の箱の

うらふ竹とこまじ糸にてつらふと  
よくして下家燻ぐふ入かくべし

所貯る年中貯る方

あつじき梅と

厚このまわりと漆をよよくわり  
ふ入ふとよよくしてせやく

### 飲食

九月一ヶ月食物の類とあら先出と

### 新蕎麥

①新蕎麥や客も給  
はも後より可也

新蕎麥と麻豆は不焚りたり玄城

### 柚味噌

①柚釜。柚干  
ひういオナ名陽明家へ  
りきんりい

消し炭や柚をふけて後の上オ左

### とち餅

①榎の実と擣き浸し粉  
よくして團子とす

### 蒲萄酒

①世俗の和制とる物を  
好酒ふぶとと浸し

置ておれとのわり漢土の制と  
ハ異なり

## 九月飲食 料理献立

禁 生姜ハ九月多く食へ  
物 春小至とと眼と病む壽

を撒し 筋力と減らす妊婦  
これと食へ生を子六指さしむ

○冬瓜今月食へ反胃と病む  
霜ふりて後食ふ一孫真人の説

好 雞肉 九月より十一月まで食  
物 豆一 稍補あり他月の宜りず

### 料理汁

① 味噌汁  
② 菜付汁

ちんちんご 小かぶ  
ゆの皮 手房

あまご白やま くら塩たらし  
あまご きのこ ころも

### 膾

① 白身玉のあまご  
② 岩魚のり

せしごほつろ 白身玉のあまご  
うじごほつろ 岩魚のり

取のうけ  
たうぬきうま  
木くしげせんぼ

きまご・あかい  
たこん・くろ・せうが  
ゆのこ

あまご・さより  
まろしあこん・ゆ  
あろしあこん・ゆ

わらび・たこん  
あまやうが  
くろ・あまこかん

あろん・あろん  
あろん・あろん

清汁  
さけの  
あま

あまご・あまご  
あまご

くろ・あまご  
あまご・あまご

あまご  
あまご

たうげ  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

和會物

かまごせん  
まろしげ  
あまご

干いっごき  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

あまご  
あまご

差味

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

球、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

きのこ、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

煮物

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

和會物

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

吸物

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

松茸、人参、  
きのこ、  
きのこ

日本歳時記拾遺

全三冊

先年貝原先生作の日本歳時記全冊

賣物、中、右、家、時、記、長、月、令、物、全

拾遺と号し、以、中、土、用、の、各、格、各、月

節、分、の、と、云、雅、俗、の、好、嫌、を、加、へ、お、も

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

博物荃

合本一冊

社、本、の、社、佛、部、人、物、草、木、魚、鳥、を、外

天、地、の、間、の、多、委、り、出、一、委、り、と、守

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

神佛祭礼記

小本一冊

日本、中、神、社、の、祭、礼、佛、家、の、縁、日

あ、ろ、く、化、一、能、修、の、修、り、と、守

